

東海大学研修航海実施報告

— 2022年度（第52回）研修航海 —

齊木ゆかり^{*1}・田巻以津香^{*2}・本多ゆみえ^{*3}・高木博子^{*4}・
アシュクロフト ロバート ジョン^{*5}・鳥居徹也^{*6}・日比慶久^{*7}・
松前義治^{*8}・原木岳史^{*9}・村西絢斗^{*10}・稲垣花菜^{*11}・千葉雅史^{*8, 12}

Abstract

The 2022 educational cruise was designed to deepen our study of local history, culture, and customs, sometimes locally, sometimes globally, under the theme of “WA! Connecting to the Future”. In order to achieve the objectives of the voyage, we prepared a variety of training programs, including 1) training (offshore lectures, English conversation classes, first aid training, pre-departure survey, port of call survey, and training survey report), 2) events, and 3) onboard clubs. We also took care to ensure smooth communication among the students in managing the ship. Overall, the training program provided students with fresh challenges that they had never faced before. The 30 days of the 2022 educational cruise, breaking a three-year hiatus, was a memorable and beneficial experience for the trainees in their future lives.

1 はじめに

デンマークの国民高等学校に範を求めた望星学塾という私塾に端を発した東海大学は、学生と教職員の人間的な触れ合いを基調として発展してきた。28,000人を超える学生規模を有する今日においてもその基調は変わらない。大学全体で実施する研修航海は国民高等学校の教育理念の1つの形態である。

今から55年前、1968年3月1日に第1回の海外研修航海が出港した。それから半世紀以上もの歳月をかけて脈々と紡いできた教育プログラムが、2019年度に流行した新型コロナウイルス

*1 (団長) 東海大学語学教育センター *2 (副団長) 東海大学体育学部
*3 (医師) 東海大学医学部 *4 (看護師) 東海大学医学部付属病院 *5 東海大学国際文化学部
*6 東海大学文理融合学部 *7 東海大学教養学部 *8 東海大学工学部 *9 東海大学学長室
*10 東海大学サイエンス・エンジニアリングカレッジオフィス
*11 東海大学スルガバйкаレッジ静岡オフィス *12 (実行委員長) 東海大学理系教育センター

感染症の世界的拡大の影響を受け、余儀なく一時的に見合わさざるを得なくなった。しかし、海洋調査研修船「望星丸」を使った研修航海は、本学の伝統と歴史の重みを背負っていることもあり、いかなる時勢にあっても継続的に学生諸君に提供すべきとの考えの下、2022年度は再始動に全力を挙げて取り組み、新たな挑戦と捉えて学びの機会を提供した。

過去の研修航海の寄港地の多くが海外であったが、2022年度は無理して外航ルートを求めることはせず、確実に実施可能な国内ルートで企画立案することとなった。研修期間は、2023年2月19日から3月20日までの30日間で、その間、東京都小笠原、沖縄県石垣島、鹿児島県種子島、熊本県八代、広島県広島、和歌山県新宮の全6ヶ所に寄港し（図1参照）、多様な自然や文化に触れることで、海から見た日本に対する国際的な視野を獲得し、実体験に基づく世界観と人生観の両面での確立を目指した。また、船内という限られた空間と環境の中で、参加学生84名（女子学生36名、男子学生48名）が共同生活を通して豊かな人間形成を図ることを目的とした。

本目的達成に向け、本研修の前に2022年12月26日にオンライン研修を、2023年2月16日から18日までは船内にて事前研修を行うことで研修生達の研修に関する知識を与え、心構えを示した。本研修では寄港地研修のほかに船内活動に伴う洋上研修が多数種類準備されており、これらに関しては次章以降でその詳細を述べることとする。具体的には、洋上研修、寄港地研修、生活、総務、医療・看護について報告する。



図1 航路ならびに寄港地および滞在日程

2 洋上研修

第52回の研修航海は、30日間の全日程のうち、15日間を洋上で過ごした。洋上では、寄港地調査、船上レクリエーションなどの他、洋上講座も実施された。講師は団役員、船員および学内ならびに各寄港地の関係者である。洋上講座は、洋上講座（L）、英語クラス（EL）、一次救命処置（BLS: Basic Life Support）と、それ以外の洋上講座（以降、「特別洋上講座」とする）に分けて実施された。

2.1 講座

2.1.1 洋上講座

洋上講座は、オンライン事前研修と研修航海中でそれぞれ実施された。このオンライン事前研修では、全3講座（L1～L3）が用意された。オンライン事前研修時に実施されたL2では、本多団役員（医師）ならびに高木団役員（看護師）による医療チーム講座「研修前・研修中・研修後の健康管理について」の講座名で、船上という限られた空間の中で生活するうえでの体調管理、COVID-19に対する注意を中心に手洗い、研修前・中・後の健康管理について話された。全8講座（L4～L11）、が実施され、種子島、熊本、広島、新宮に寄港の際は合計5回の特別洋上講座が実施された。各講座内容は表1、表2の通りである。

表1 洋上講座一覧（その1）

	実施日	担当者	講座名	概要
L1	2022年12月26日（月）	齊木ゆかり	「2022年度研修航海の目的と	2022年度研修航海の「目的」：①複眼的な視野に立った人生観、世界観の確立、②協調性と豊かな人間形成の育成と「意義」について語り、その方法として1. 洋上体験：①全身で自然の厳しさと美しさに気づく、②海洋調査研修船「望星丸」の内部を知る、③船内生活、2. 寄港地体験：①団全体としての研修、②選択研修・グループ研修について話した。
L2	2022年12月26日（月）	本多ゆみえ 高木博子	研修前・研修中・研修後の健康管理について	船上という慣れない環境の中では体調を崩しやすく、COVID-19など感染症についても注意を払う必要がある。そこで、研修前から準備してほしいこと、船内や寄港地で気を付けてほしいことや船内清掃での注意点特にすべての感染対策の基本となる「手洗い」「手指消毒」については実技演習を通して正しい方法を身に付け、自分だけが良ければいいという考え方を捨て、すべてにおいてリスクとベネフィットを考えて行動することを伝えた。
L3	2022年12月26日（月）	全団役員	団役員自己紹介	2022年度の研修航海に参加する団役員全員の自己紹介が行われた。
L4	2023年2月25日（土）	高木博子 鳥居徹也	救急医療と災害医療の看護 医療の発展と医療機器の発展～研究の挫折～	自己紹介に続いて、救急医療と看護、災害医療と看護について講義が展開された。特に東海大学医学部付属病院の概要、救命センターの医療活動（インホスピタル、プレホスピタル）の概要、DMATについて、その意味と活動・役割について具体例を交えながらまた、質問を交えながら説明がなされた。講義終了後も看護学科の学生が就職について相談する場面もあり意義ある講義が展開された。 冒頭で文理融合の意義についての説明、臨床工学技士とその意義・業務内容について説明がなされる。今回は特に研究紹介の中で自己紹介がなされ、医療機器、今回は、心電計の開発の歴史について講義が展開され、心電計が医療の中で必要不可欠になり得た新たな発見とその応用技術でもあるペースメーカの技術発展について講義が展開された。

表2 洋上講座一覧（その2）

	実施日	担当者	講座名	概要
L5	2023年2月26日（日）	望星丸船長 上河内信義	海、船とともに	ご自身の生い立ちからこれまでの業務について話が展開された。実際に乗船した船や業務経歴の概略説明は、乗船した船の写真を示しながら説明がなされ、警備・取り締まりなど実際の体験談、仕事に対する心構えなどがふんだんに盛り込まれることで非常に興味深い内容であった。
L6	2023年2月26日（日）	望星丸期間長 岩本芳明	望星丸の機関部の仕事	機関の仕事について紹介がなされ、電気、空調、プロペラ、造水装置などを動かすいわゆるインフラの仕事であり、不自由を感じさせないことが重要であり、根っこの部分で支えるのが仕事と述べられた。そして望星丸の仕様（エンジンの長所・短所と主機関室）・日常業務・ドックと整備について順次丁寧に説明がなされ、当直24時間体制で機関部を監視、検査基準、必要に応じて部品を製作することなどについても解説された。
L7	2032年2月27日（月）	望星丸一等航海士 菅野正隆	海原に進み出て	自己紹介や海上自衛官時代のお話、防衛大学の特徴等について説明があった。海上自衛隊入隊後の任務についてもお話があり、中でも海賊との対峙では緊迫する感じの内容であった。また転勤と入港の足跡では、非常に目まぐるしく変わっていることが図によって示され大変な任務であることが容易に想像できる内容であった。
L8	2023年2月27日（月）	日比慶久 村西純斗	黒潮沿岸域の水温上昇に伴う有毒生物の生息域変化 （温暖化に伴う毒を持つ海洋生物の北上化現象について） 人生のターニングポイント	日本国内の世界遺産を巡る今回の研修航海から温暖化に伴う黒潮沿岸域における毒を持った生物、ヒョウモンダコ、ツムギハゼ、ガンビアディスカスの3種を事例としてPPを用いて分布の変化、食中毒シガテラの発生状況を示すと同時に侵入してきた場合の生存可否実験結果を示し、目視でわかりづらい海洋中の変化について学生が興味関心を持つきっかけになったのではと感じた。 社会人になるまでのいくつかのターニングポイントとなる経験を自己紹介形式で行った。これまでにいくつかのターニングポイントがあり、その都度私自身の心境に変化が起き、それが今の私に繋がっていることを説明した。
L9	2023年3月6日（月）	稲垣花菜 原本岳史	私の体験談 趣味と私	大学職員の仕事に興味をもつ学生のために普段の仕事について説明した他、学生時代に学んだ犯罪心理学に関する簡単な講義を通して、社会人として生きていく中で自分が普段意識していることについて伝えた。学生と年齢の近い立場であることから、学生に寄り添った形のメッセージを伝えられたように思う。 序盤は、自己紹介も含めて高校時代、大学時代の話を中心に話をした。また、大学時代から始まった趣味を“宇宙”をテーマにまとめて紹介した。中盤では、研修航海中に撮影した星空の写真を利用して南の島で観察できる星空説明を行った。終盤では、カメラの基本的な使い方を実際の写真、カメラの構造図を使って解説した。専門的な内容が強すぎたと反省しつつも、講義が終わってから詳しいカメラの使い方や星空観測について、また、研究について、質問を多く受けた。
L10	2023年3月16日（木）	松前義治	人生を楽しむためのヒント ～健康とWell-being～	日本や世界の子どもたちを対象にした健康にかかわる調査結果（ユニセフ等）を最初に紹介し、「Well-being」とは何か、WHOによる定義を説明した。また私自身の経歴と、さらに私自身がWell-beingであるために試したことを数多く紹介した。
L11	2023年3月19日（土）	田巻以津香	コンプレックスをチカラに	自己紹介を交えながら学生時代から現在にいたるまで、コンプレックスが行動を起こす源になっていたことを紹介した。急遽設けられた講座だったため時間が短く質疑応答を設けられなかったが、複数の学生から講座後に直接質問を受けたことから少なからず為になる内容を伝えられたと考えられる。

2.1.2 Intercultural Communication Classes in the Bosei Maru (EL)

本講座は、自分や相手の態度（表情・ジェスチャー・アイコンタクト）を含めた基礎的な英語コミュニケーション能力、外国語運用能力を身につけ、異文化社会を理解することを目指して実施された。英語による異文化コミュニケーションを練習し、不安や気後れでコミュニケーションがうまくできないことへの対策を行った。加えて、本航海は国内航路であることから、

表3 Intercultural Communication Classes in the Bosei Maru 内容一覧

	日付	主な内容
EL1	2023年2月25日（土）	SONG: 'Sailing' by Rod Stewart Topic: Travelling Goals: Develop Listening & Speaking Skills: Vocabulary Building; Talk about Places & Travel; Focus on Present Continuous tense.
EL2	2023年2月27日（月）	SHORT FILM: 'Signs' by Patrick Hughes, Topic: Communication, Goals: Develop Listening & Speaking Skills; Vocabulary Building; Talk about different types of communication.
EL3	2023年3月3日（金）	CULTURAL STEREOTYPES: I'm from Japan!, Topics: Communication, Goals: In this class we'll look at some common stereotypes of Japan, and we'll practice answering questions about Japan and Japanese culture which you might be asked when you meet someone from another country.
EL4	2023年3月6日（月）	ENGLISH GAMES, Topic: Having fun with English and Teamworking, Goals: Develop Listening & Speaking skills; Vocabulary building; Improve Teamworking Skills.

日本文化を改めて見つめ直すプログラムも含まれ、日本文化を理解し外国人に発信するためのトレーニングも実施した。各講座の主な内容は表3の通りである。

2.1.3 一次救命処置 Basic Life Support (BLS)

一次救命処置の講座は、2月17日（金）の事前研修において、心肺蘇生法とAEDの講習を行った。講座は午前9時からの全体座学と実技に分けられている。実技には、3体の人形および3台の訓練用AEDが用意され、1班ごとに人形とAEDを使用して実施した。座学終了後の実技は、1～3班および4～6班の2回に分けて実施した。昼食を挟んで、午後から7～9班、10～12班、13・14班の3回に分けて実施した。看護師および医師のデモンストレーションの後、各班一人ずつ2分の心肺蘇生を体験、続いて心肺蘇生とAEDを利用して2分の心肺蘇生、AED、さらに心肺蘇生の順で一時救命処置を体験する。最後に船内のどこに本物のAEDが設置されているのかを確認し本講座を終了した。また本講座は、船舶医療の内容を追加して3月16日（木）に練習生に対しても実施した。

2.1.4 特別洋上講座

（1）2023年3月8日（水）西之表市教育委員会：鮫島 斉 氏

「種子島の歴史・文化」 種子島の文化といえば鉄砲伝来。誰もが知る歴史をアプローチとして、特産物の安納芋や最先端科学である宇宙センターについての説明がなされた。午後からの選択研修で訪れることになる鉄砲館や月窓亭、種子島宇宙センターでより深くかつ効率的に学ぶためのプレ講義となった。さらに自衛隊の基地整備についても触れられ、種子島の過去から将来に向けての希望ある話を伺うことができた。

（2）2023年3月11日（土）東海大学：山田 清志 学長

「How to overcome language difficulties ～苦手な英語を克服するには～」 山田学長の生い立ちから、学生時代、高校時代、学部生、大学院生、大学教員での出来事を詳細にユーモア交えてお話しいただいた。英語を学ぶ上での重要事項のアドバイスをいただいているが、それに加え社会を生き抜くポイントも散りばめられていた。これから社会に出る学生たちの不安な心に深く突き刺さったようである。講演終了後の質問時間では、予定した時間を越えるほどの質問があり、講座終了後にも学長とお話がしたいという学生であふれ、そのような学生に対して丁寧にご対応いただいた。

(3) 2023年3月13日(月) リベラグループ代表取締役会長：山本 訓史 氏(政治経済学部卒業生)

「後輩へのメッセージ」 大学卒業後のご自身のキャリアについて詳細にご説明いただいた。大学卒業後は、家業でもある海運事業を主とするリベラグループに入社。以降、キャリアブラッシュアップのための大学院進学、多くの経験について語る内容であった。船の売買に関する不思議、父親の会社の株式を相続ではなく購入したことは非常に印象深く、「なぜ？」を引き出す講演であった。この講演により経済にまつわる深い知識と興味が湧いたと思われる。

(4) 2023年3月15日(水) 被爆を語り継ぐ会：畑口 實 氏

「原爆被害の概要とヒロシマの心」 広島滞留在最終日。平和学習前に講演いただいた。冒頭で原爆投下前の世界の戦況について説明がなされた。原爆投下のためにとられた行動、投下後の状況などが詳細に説明され、悲惨さが改めて伝わる。講師自身胎内被爆者でもあり、複雑な心境を述べられ、当時、差別があったことにも触れた。また、現在の広島県民や被爆者の被爆に対する思いについて述べられ、多くの感情が伝えられた。戦争、核と考えさせられる講義であった。

(5) 2023年3月18日(土)：新宮市観光協会ガイド：西浦 康代 氏

「絵解き」 人の一生や死後の世界を描いた曼荼羅を解説いただいた。曼荼羅をしっかりと見ることもできた。話の中には、イザナミノミコトとイザナギノミコト、スサノオノミコトや天照大神などの神話の話もあった。そのほかにも新宮の由来、神倉神社の由来、めはり寿司の由来についての解説もあった。

2.2 寄港地事前調査

今回の研修では6ヶ所の寄港地について「寄港地事前調査」を行った。まず、12月のオンライン研修にて各学生を6つにグループ分けし、そのグループに寄港地を割り振ったのち、各寄港地に対して責任を持って調査する体制(責任者・副責任者・記録)を確立した。研修学生は各寄港地について、①地理・自然環境(動植物や気候、地質)②文化(伝統文化から近現代までにおけるその地域での継承文化)、③歴史(地域の成り立ちと特徴、戦前・戦後・経済成長・公害)、④食(地域における特産品・並びにその地域特有の食に関わる事案)、⑤経済・産業(産業構造、地場産業など)、⑥世界遺産：世界遺産、見どころ、観光の注意など世界自然遺産・登録準備、ラムサール条約など、6項目について、調査する。コロナ禍であり、従来通りの調査ができないため、清水を出港するまでの期間にて資料を収集し、オンラインにて事前打合せの後、発表スライドを作成する必要がある。インターネット環境がない船内では収集

した互いの資料を突き合わせ、発表スライドのブラッシュアップを行なった。研修航海では各寄港地の入港前に「寄港地事前調査報告会」を行い、各自調査結果を全研修生の前で発表し、質疑応答を行った。このような取組により、研修学生全員が寄港地に関する情報を事前に共有した上で、寄港地における地上研修に臨むことができた。

すべての寄港地に立ち寄ったのち、帰港地の横浜入港前日に「研修調査報告会」を開催した。実際に立ち寄ったことによって得られた結果をもとに「～歩いて 学んで わたしの街～」と題し「旅行代理店修学旅行セクション営業担当になった設定」で、寄港地研修プログラムを作成し寄港地ごとに発表した。今回の「寄港地事前調査」「寄港地研修」「研修調査報告会」という一連の活動を通じ、研修学生は文章やネット情報だけでは得られない貴重な体験を得たと同時に、現地現物にて自分自身の目と足で確かめる大切さを感じることができたものと思われる。各寄港地担当班の調査発表概要は以下の通りである。

2.2.1 小笠原

小笠原担当班では、言語（方言）、自然環境（気候・動植物）、歴史、観光地、世界遺産（文化遺産・自然遺産・複合遺産・登録準備）、その他祭事等について様々な観点から詳細に調査し、発表した。船の揺れが激しく、学生食堂に出てこられる学生が少ない中で、よく準備された発表であった。

2.2.2 石垣

石垣島担当班では、6つのテーマにサブリーダーを設け、乗船前にすべてを完成させるように指示し、オンラインにて事前チェック並びに指導を行い、乗船後は船酔いの恐れもあるため、発表練習や最後の調整のみを行う事とした。発表はパワーポイントを使用したのが非常に良くまとめられ、聞き手側が興味関心をもつ工夫が為されていた。発表時間が練習時に60分を超える時間となり余剰部分をカットし時間調整を行ったが、発表が若干切れてしまっことが反省点であった。

2.2.3 種子島

種子島担当班では、言語（方言）、自然環境（気候・動植物）、歴史、観光地、世界遺産（文化遺産・自然遺産・複合遺産・登録準備）、その他祭事等について様々な観点から詳細に調査し、発表した。歴史や方言を含め、内容の充実した発表であった。

2.2.4 八代

Teamsでの初回会議では、役職者を決める時点までは担当団役員で進行したが、それ以降は役職者に任せた。その結果、学生らしく、自由な発想の寄港地事前調査ができたと思われる。一方、学生側から船上でのスケジュールについて頻繁に質問が繰り返され、その時点で可能な範囲の船上スケジュールを伝えることで、乗船前にやるべき工程を定め、場合により変更して作業を進めていた点も素晴らしかった。さらに寄港地調査報告会をイメージしたエンターテインメント性も含め、工夫を凝らしたスライドも学生自身の提案で進めていた点は称賛できる。

2.2.5 広島

オンラインでの顔合わせで初めて会う仲間とオンラインだけの担当打ち合わせを経てTeams中間報告会をした時には、学生によって意識も内容も大きな差があり、心配した部分

も多かった。しかし、事前調査発表の時にはまるで違っていた。船で活動して時間もたっていたことから、船上での準備する様子は、まさに一丸となったチームであった。会場を沸かせながら発表する姿、生活班の中で広島について語っている姿は、とても頼もしく、成長を感じる瞬間であった。

2.2.6 新宮

新宮担当班による顔合わせはオンラインで開催された。担当割振りを決める際、一度役割分担が決まったものの再度担当者を決め直す事態が生じた。しかしこの問題もスムーズに解決した。その後は学生自身で工夫して資料作成等の準備を進めることが出来ており、担当団役員として不安材料は無く、発表当日をむかえた。発表当日も写真を多用した発表、聞き手側に問いかける発表など工夫した内容となっており今まで馴染みのなかった新宮に興味を持った学生は多かったと考える。

2.3 行事

2022年度研修航海では、行事として「船上レクリエーション」「洋上卒業式」「卒業パーティー」「送別パーティー」を行った。いずれの行事も時間の余裕がない中で準備することを余儀なくされたが、研修生の自主的な取り組みと努力によりそれぞれ充実した内容となった。また船側の協力により、船上で2つの特別行事「水圧実験」と「星空観察会」を行った。海況、天候を伺いながらの実施であったが、乗組員の積極的な協力を得られ、学生たちの満足度も高い時間となった。

2.3.1 船上レクリエーション

船上レクリエーションは、午前中にインタビューゲーム、ジェスチャーゲームを、午後に絵しりとり、スポーツ大会（綱引き、大縄跳び）を、夜にバースデイチェーン、ビンゴゲームを実施した。実施内容のイメージを十分に共有できない中で乗船前から準備を進めていた。出港後は海が荒れ続けたため、乗船後の打ち合わせも儘ならず苦勞していた。しかし、空いた時間に皆で協力して準備したおかげで、行事当日は、朝から練習生と乗組員も参加してとても盛り上がっていた。船上での最初のイベントを通して仲間意識を持てたため、その後の船上活動は、これまで以上に進めやすくなったように感じた。

2.3.2 洋上卒業式

沖縄到着までの悪天候や過密スケジュールにより、事務局、船、団役員、担当学生とコミュニケーションを取りながら準備を進めることが容易ではなかったが、学生たちの助力と努力もあって最終的には素晴らしい卒業式を執り行うことができた。他の行事と比べて公式性が高いため、慎重に進める必要があった。また、今回の航路では、卒業式当日の天候が読みづらく、実際に当日の朝になるまで開始時刻を決定することができなかった。この不安定なスケジュールが準備をしている学生たちを不安にさせていた面もあった。晴れのパターン（後部甲板）、雨のパターン（学生食堂）、午前のパターン、午後のパターンなど、スケジュールを複数通り計画していくうえで学生に負荷（特に心理面）がかかっていた。「大まかなスケジュールで構わない、あとは当日担当団役や副団長が何とかする」といったような勇気づけを繰り返すことで、学生たちの不安が少しは和らいだようだった。今回の経験は、学生たちが臨機応変さを学

ぶ上では良い機会となったであろう。

当日準備では、開始時刻が直前に決定したのにもかかわらず、全く問題なく、むしろ予定より早く準備を終えることができた。これは、甲板長をはじめ船員の多大な協力もあってのことだったが、学生たちの迅速で的確な素晴らしい行動の結果とも言えた。行事担当の学生たちが（他の行事担当である学生を含めた）全学生に協力を依頼し、素早く椅子などを移動させることができていた。卒業式自体（晴れたため後部甲板で実施）は、マイクがハウリングしてしまったことを除けば、満足できる内容だった。当日朝ハウリングテストを行っていたが、風などの影響であとからスピーカー位置を少しずらしたのが原因だと考えられる。最終的に天候は最後まで晴れ／一部曇りとなり、卒業式日和の良い天候となった。片付けも全学生の協力があり問題なく進行できた。

事務局との連絡や情報交換は Teams を通して行っていたが、電波の入らない清水～小笠原、小笠原～石垣については、ほとんど計画や準備ができなかった。もう少し早めに準備を始めてもよかったと反省している。練習生側との情報交換は、主に副団長を通して藤村次席一等航海士と行っていた。当日朝の練習生を含めたりハーサルでは、様々なアドバイスをいただき、変更事項もそこで適宜確認した。今回の航路は寄港地が連続しており時間が十分に取れなかったこともあるが、もう少し早めに情報を交換することでスムーズな準備が実現できると思われる。

今回の洋上卒業式では、学長が乗船し直接学位記を授与した。学長が揺れている船上でどのように学位記を渡すのかについて、学生や船側からも提案があった。最終的には、かつて松前達郎総長が使っていた背の高い椅子を利用することで、恙なく学位記授与を執り行うことができた。

今回の不安定なスケジュールの中で、暗中模索で計画を立てて準備をし、そして洋上卒業式を成功させたことは、学生たちにとってはまたとない機会と経験であり、大きな学びと成長につながったと信じている。

2.3.3 卒業パーティー

卒業パーティーは18:00開始で計画し、会場の飾りつけは担当メンバーだけではなく、自主的にお手伝いをしてくれる学生、団役員の協力もあり午前中には完了していた。卒業パーティーは1) 開会の言葉、2) 学長祝辞、3) 乾杯（副団長）4) クイズ、ビンゴ大会、5) 研修団卒業生、練習生から一言、6) 次席一等航海士祝辞、7) 船長祝辞（かもめの季節）、8) 団長祝辞（詩吟）、9) 記念品贈呈、10) 閉会の言葉で進行した。学長、練習学生や望星丸乗組員の方々にも、大いに盛り上げていただいた。記念品は手作りのアルバムを作成した。作成するにあたり卒業生、練習生全員の写真を一定数集める必要があり、それをまとめるのにかなりの時間を要したため、前日、前々日は23時ころまで作成にあたっていた。航海前の準備段階から、積極的に動くメンバーは数少なく、意見を出して議論することに苦労していたが、パーティー終了後には達成感と笑顔を見ることができた。大成功となったパーティーは自身の成功体験として心に残るものとなったのではないと思う。

2.3.4 送別パーティー

研修航海最終日の前夜に送別パーティーが開催された。担当メンバーによる顔合わせでは責任者等の役職決めがスムーズに進み、内容検討まで進めることができ、その後の複数回にわたるミーティングについては担当学生のみで行った。責任者を務めた学生は役職決めの際に全体を引っ張ることに不安がある旨を言葉にしていたが、内容を詰めていく中で出てきた疑問点や決定事項、団役員の調整が必要な事柄を担当団役員に逐一報告・相談していた。乗船後においても報告・相談はもちろんのこと、全体を積極的に引っ張っていく様子を直接伺うことができ、責任者として成長している姿を見られた。担当団役員としても常に進捗状況を確認することができたことに加え、責任者主導の下、メンバー全体で協調性を発揮している様子がみられ、安心して学生に任せることができた。パーティー当日は研修団をはじめ、船長、乗組員、練習生も参加し、パーティーを楽しみつつも別れを惜しむ会として成功を収めた。

2.3.5 特別行事

(1) 水圧実験

2023年3月3日(金) 13:00~15:00、望星丸に搭載されているCTD ウィンチを使用し、水深1000Mまで物体を沈めてその変化を見る実験を実施した。研修学生は発泡スチロール製のかき氷カップにそれぞれ文字やイラストを描きネットに入れた状態で沈めてもらった。発泡スチロール製のカップは空気を多く含んでいるため、水深1000Mから引き上げた際には5分の1程度の大きさにまで縮んでおり、学生たちはその変化を楽しんでいた。合わせて、後部甲板でCTD ウィンチを操作する乗組員の作業の様子を見学することもでき、時化の多かった本航海において、後部甲板での時間を過ごす貴重な機会となった。実施にあたっては、海況や天候の影響、実験可能水域の選定など船側の大きな協力のもと実現した。事前の打ち合わせから積極的に協力姿勢を見せていただき、大変スムーズに実施することができた。

(2) 星空観測会

2023年3月6日(月) 20:00~20:30、藤村涼次席一等航海士に解説をいただきながら、後部甲板で実施した。当初は3月3日(金)に予定していたが雲量が多く延期となり、天候状況から3月6日(月)の実施が決定した。船側との連携がスムーズにできていたため、急な日程変更にも柔軟に対応することができた。当日は月齢12.8の状態で月明かりが強すぎ、満点の星空とまではいかなかったが、国内では条件が整った場合しか見ることのできないカノーブスも見ることができた。藤村次席一等航海士の「船乗りならではの」解説も非常に面白く、多くの学生が感嘆の声をあげながら星空を観測していた。

(3) 1日船長

2023年3月16日(木)、卒業パーティーの景品として「1日船長権」が設定された。上河内船長から様々なアイデアをいただき、以下の内容を実施した。①3月15日(水)広島港出港時の汽笛操作、②船長服の着用、③艦内放送、④操舵体験、⑤サロンでの昼食、⑥各部署(ブリッジ、機関部、事務部:司厨)の安全確認、⑦居室安全確認。③艦内放送においては、上河内船長発案の航空機の機長アナウンスを模した原稿を読み上げ、全艦内に放送した。船長服を着て船内各所で写真撮影を行い、1日船長本人のみならず、研修生全体で盛り上がった1日と

なった。

2.4 洋上クラブ

12月の事前オンライン研修において団役員から各クラブの大まかな活動内容を発表し、その後、希望するクラブに分かれてオンラインにて各クラブ研修学生同士で活動内容の詳細を決定した。基本的なクラブを1つ決め、その他希望するクラブにも参加できるとして、複数クラブ所属可とした。研修生を主体としそれぞれのクラブが意欲的に活動を行うことができた。各クラブの内容概要は表4の通りである。

表4 洋上クラブ一覧

クラブ名	概要
English Club	本クラブでは、研修生たちは積極的に英語を使って活動に参加していた。活動をする中で、自然に英語で発話する光景も認められた。また、学生同士のコミュニケーションが円滑にされるに伴い、リラックスした状態で英語を使用していた。
音楽クラブ	音楽クラブは当初、各人が有志でウクレレなどのマスク着用のまま演奏できる小型の楽器を自宅から持ち寄り、皆で演奏することを予定していた。しかしながら、他荷物の多さなどから楽器の持ち込みを断念する学生が多く、想定外に楽器が集まらなかった。また、コロナ禍であることから歌をうたうことなどには懸念を示す学生が多いため、活動としては音楽談義をするにとどまった。ペットボトルや貝殻から楽器を作製する、各寄港地の様々な音を集めて編集し曲を作る等の興味深い活動提案もなされたが、他クラブと兼部の学生がほとんどであったこと、クラブ活動の時間が少なかったことから全員での活動実現に至らなかったのは残念である。
Visual Media Club	乗船前のクラブの準備では、船上生活のイメージができていない中で頑張って準備できていた。乗船後は、海の状況や行事、寄港地研修などでクラブの活動時間が短く十分な活動ができなかったことはとても残念だった。それでも夕食の後に絵を描いたり、写真、動画を編集する姿が見受けられた。最後にフォトコンテストが開催され、多くの参加者から素敵な写真が学生食堂のテーブルに飾られた時には、食堂が明るくなり、研修生のみならず、海洋学部の練習生も夜な夜な写真を見て盛り上がっていた。とてもいい企画だったと思う。
テーブルゲームクラブ	初日から自主的な活動が多く見られた。クラブに所属していない学生も各自でボードゲームも持参していたため、皆が多様なゲームを経験できたようだ。その過程で学生たちのコミュニケーションも盛んになっていき、仲良くなるためのツールとしてよい機能を果たしていた。寄港地が続く航路後半では、ボードゲームで遊ぶ学生の数も減り、またクラブ活動の時間も取れなかった。しかし、それまでの間に学生たちの仲間かなり深まり、ボードゲームを介さずとも、トークだけでも十分にコミュニケーションが取れるようになっていたため、特に問題視はしなかった。しかしその中でも最後まで行われていたのが麻雀である。毎晩のように継続的にプレイされており、練習生を含めたコミュニティの形成に成功していた。
海洋・天体観測クラブ	清水～小笠原、小笠原～石垣島までは荒天により、波浪が厳しく甲板に出るの観望などは思うように行うことができなかった。デッキから海洋生物が確認された場合に船内放送をしてもらう等の対応や石垣島出航後に星空観測を行ったが月の明るさが強く細かな星々がうまくみることができなかったのが残念であった。
トレーニング&スポーツクラブ	甲板に出て体動かす予定をしていた中、荒天が続き甲板にも出ることができず、船室に閉じ込められる日々が続いたこともあり、ボクシングクラブを手にはめ足にレガースを付けミットめがけてストレス発散と運動をかねパンチとキックを繰り返してもらう事を数回行った。その後は準備したサッカーボールを用いて甲板でフットサル等行ったが、あまり多く実施することができなかったのが残念であった。
ヨガ&ストレッチクラブ	航海前半は波が高く、後部甲板での活動が制限されていたため活動ができなかった。海況が落ち着いてからの活動となったため、実質2回しか活動の時間を確保できなかったことは残念であった。また、結果的に団役員が指導する形の活動にとどまってしまう、学生による自主的な活動までつなげることができなかった点も反省点としてあげられる。実施できた2回は天候も良く、潮風や目の光を感じながら実践でき満足度も高かった。
ダンスクラブ	複数のクラブに所属する学生が集まっていた中での活動は苦労が多かったように思う。加えて、航海前半は船の動揺が激しく甲板での活動が制限されたこともあり、活動自体がかなり制約の多いものとなってしまった。最終的に活動は学生食堂での1回にとどまってしまったが、集まった際は狭いにもかかわらず皆和気藹々と踊っている姿が見られて良かった。なにより、学生の自主的な活動に終始していたことが良かった点として挙げられる。
メンタルトレーニングクラブ	事前研修時にこそ少し活動できたが、揺れが激しくなり担当団役員がずっと床に臥せていた石垣までと、寄港地の連続でクラブ活動の時間が取れなくなった航路後半では、ほとんど活動の時間を取れなかった。学生自体でもいくつかの活動案を出してくれたが、担当団役員がいない状況下での活動はほとんどできなかった。活動の内容を明確に定義し、具体的な実施内容も予め責任者等に伝えておくべきだった。なお、事前研修時には、膝と膝がぶつかる直前の距離でお互いに椅子に座り、見つめ合うという活動を行った。これは、見つめ合った際に、自身のこころや身体がどのように反応するか、また相手がどのように反応するかを観察するトレーニングである。自分の感情などを知ること狙ったものであったが、学生たちの反応を見るにそれなりの効果や気づきがあったようだった。
文芸クラブ	船が揺れている時は、読んだり書いたりという作業が辛くなるため、積極的な活動ができなかったが、研修生と団役員全員の作品をまとめ、文集を作ったことは大きな意味があった。

3 寄港地研修

本研修では、小笠原、石垣、種子島、八代、広島、新宮に寄港した。寄港地研修として、全体研修、選択研修、グループ別計画研修を行った。選択研修については、オンライン研修で副団長が各コースについて説明し、その後 Forms を使って希望をとり調整した。グループ別計画研修は原則として前日消灯時刻までに（事前に十分にグループ分けの時間を設けられなかった場合は出発日朝まで）「グループ別計画研修申請書」を提出させ、観光にとどまることのないよう意識を持たせた。グループを組む際には、どのグループも男女混成であることを条件に3人以上であれば自由にメンバーを決められることとした。また、選択研修後にグループ別計画研修がある場合は、選択研修のコースごとにグループを編成させた。各寄港地研修の詳細は以下の通りである。なお、全寄港地において後援会、校友会、白鵬会の皆様を中心に温かく盛大な歓迎をいただいた*。

3.1 小笠原《二見港》(2023年2月22日～24日)

小笠原諸島父島における選択別研修は3コースに分かれて実施した。Aコースの平和学習では夜明山陣地、初寝浦展望台等をまわり父島に残されている要塞などの戦争遺跡を巡った。太平洋戦争時に使用された砲台やトーチカなど数多くの遺跡が残り、触れることもできる貴重な戦争遺跡を見学した。Bコースの自然遺産探訪では東平アカガシラカラスバトサンクチュアリ、中央山等をまわり、世界自然遺産の森で自然観察を行った。大陸と一度も繋がったことがない海洋島に形成された森は今も進化・分化を進めている。また外来種問題にも触れながら森

*註：本航海での寄港地における交流は以下の通りである。

- 1) 2023年3月4日(土)@石垣 入港時に岸壁でエイサーによる歓迎を受けた。
- 2) 2023年3月10日(金)@八代 九州キャンパス主催による入港セレモニーを開催していただいた。岸壁での東海大学附属星翔高校吹奏楽部の演奏で出迎えられ、山田学長、木之内九州キャンパス長、二重作連合講演会長、荒木学長補佐によりご挨拶をいただき、九州キャンパスからハムとベーコンの記念品を頂戴した。また、特別ゲストとしてくまもんが来訪し、記念撮影などの交流を持った。
- 3) 2023年3月11日(土)@八代 後部甲板にて九州キャンパス主催による出港セレモニーが開催された。荒木学長補佐の挨拶に続いて木之内九州キャンパス長が率いるスーパーウィングスによるフォーメーションフライトによる激励をいただいた。研修団からは、斉木団長、矢野学生長がお礼の挨拶を述べた。
- 4) 2023年3月18日(土)@新宮 学生食堂にて新宮市による出港セレモニーを開催していただいた。速水盛康(はやみしげやす)新宮市教育長にご挨拶をいただき、速水教育長及び小淵学(こぶちまなぶ)新宮市企業立地推進課長から花束を、速水教育長より記念品(菓子、お茶、ポストカード)をいただいた。研修団からは斉木団長、矢野学生長がお礼の挨拶を述べた。

を散策した。Cコースの海洋環境学習及び島内展望では島内の各展望台を中心に巡り、小笠原の自然や歴史を学び、海洋センターではウミガメを題材とした海洋環境学習をガイド2名添乗のうえ、研修を行った。

3.2 石垣《石垣港》(2023年3月4日～6日)

石垣島ではAコース西表島研修(東海大学沖縄地域研究センター、星砂海岸等)、Bコース観光と平和研修(平野海岸にてビーチクリーン活動、八重山平和祈念館等)を行った。Aコースは離島ターミナルから西表島に向かい東海大学沖縄地域研究センターを訪問した。常駐されている伊藤芳英技術員から講義を受け、周りを散策した。センター裏を流れる浦内川が干潮時でマングローブ林をはじめ貴重な動植物を観察した。その後バスで星砂の海岸へ移動した。移動時や現地にてガイドの方から西表島に生息する動植物の特徴・特性の説明を聞き、現地にて各自が周辺を散策し西表島の自然環境を大いに体感した。エコシステムの重要性和真逆にあるシステムを破壊する海岸ゴミの問題の両面が体験できた寄港地研修であった。Bコースは4日石垣港入港後11時からアースクリーン(ビーチクリーン)について縄文企画田中秀典氏からパワーポイントを使用した事前学習が実施された。マイクロプラスチックに関連する様々な環境や人に関わる問題などを学んだ。それらを知ったうえで5日平野海岸にてアースクリーンを実施した。聴講だけではなく現地現物にて体験する意義を研修生は学んだ。その後沖縄戦線から避難した際にマラリアによる二次被害犠牲者の慰霊塔と平和祈念館を訪れ学芸員からの説明を聴講した。

3.3 種子島《西之表港》(2023年3月8日～9日)

2023年3月8日(水)午前10時、種子島西之表港へ入港。学生食堂にて西之表市教育委員会社会教育課鮫島係長にご講演いただいた。「種子島の歴史・文化」をテーマに選択研修およびグループ研修の事前学習となる講座であった。選択研修は工芸体験のAグループと文化歴史のBグループがあり、Aグループは、1日目に種子島宇宙センター宇宙科学技術館、2日目に窯元へ赴きろくろ体験で焼物に挑戦した。両日とも選択研修後、グループ研修へ移行した。Bグループは、1日目に種子島総合開発総合センター「鉄砲館」と月窓亭を見学、2日目に種子島宇宙センター宇宙科学技術館を訪れた。

3.4 八代《八代港》(2023年3月10日～11日)

2023年3月10日(金)午前8時に八代港に入港。熊本校舎、後援会から入港セレモニーを受けた。八代では、熊本校舎のバス2台を利用して全体研修が行われた。初日は、八代から阿蘇実習フィールドに移動、昼食後、旧阿蘇校舎震災遺構(旧東海大学阿蘇キャンパス)を見学した。ここではガイド付き研修であった。その後、阿蘇山へ移動、草千里展望台、熊本市内で一時解散して各自夕食をとり、再集合で一路八代港へ向かい帰船した。八代港では、プロジェクトマップも行われていた。熊本2日目(最終日)となる3月11日(土)は、朝9時から熊本市内へ向けてバスで移動、グループ研修、昼食は各自でとり、13時30分に再集合、一路八代港へ戻り、16時20分に出港セレモニー、18時に出港することにし。八代の寄港地研修では、2日間をとおして研修地が熊本市内または阿蘇であったことから移動に多くの時間を割かれ、十分な研修時間の確保に苦悩した。

3.5 広島《宇品港》(2023年3月13日～15日)

広島における選択別研修は2コースに分かれて実施した。Aコースの文化歴史では宮島を巡り、「海運の女神」が祀られている厳島神社では宮司の案内により神社を参拝し、ご利益がある「海上の交通安全」「水難避け(船)」祈祷も行った。Bコースの平和学習では下船後、各自で呉市まで向かい、大和ミュージアムとてつものくじら館を見学した。大和ミュージアムでは呉港の歴史と戦艦大和の説明を受講した。

3.6 新宮《新宮港》(2023年3月17日～18日)

3月17日(金)に新宮港に入港し、初日はAコース(本宮大社・熊野古道)とBコース(太地町・那智大社)の2グループに分かれて選択研修をおこなった。Aコースにおいては、本宮館にて熊野信仰や熊野三山についての講話を聞いた後、熊野古道中辺路の伏拝王子から本宮大社まで語り部の案内のもと散策した。なお、予定されていた道普請については、雨天のため中止となった。Bコースにおいては、太地町公民館にて民族と生物クジラについての講話を聞いた後、太地町立くじらの博物館とマリナリウム水族館を見学した。その後、那智大社や青岸渡寺、那智の滝周辺を散策した。

3月18日(土)は、学生食堂にて「絵とき」についての洋上講座を受けた後、グループ別研修をおこなった。新宮方面に向かったグループと紀伊勝浦方面に向かったグループがあったが、いずれの場合も、雨が降っていたこと、交通の便が悪かったことから研修内容は各地周辺の散策にとどまった。新宮方面に向かったグループについては、JR新宮駅より貸切バス2台にて望星丸へ帰船した。全員が帰船した後、学生食堂にて出港セレモニーがおこなわれ、速水盛康新宮市教育長からのお言葉の他、花束および記念品を頂戴した。

4 生活

『2022年度研修航海 研修のしおり』の「6. 生活」(p.29-38)に則りながら、全般的には学生の自主性を尊重し、班長会議を中心に学生を主体として生活上のルール設定や見直しをおこなった。様々な生活上のルールについては班長会議を中心に学生間で議論し、必要に応じて各係への伝達および打ち合わせが実施された。団役員から指示することは少なく、学生からの発議によって各係での打ち合わせが積極的に実施されていた。コロナ禍において長らく密を避ける生活をしていた学生たちにとって、84名での30日間にもおよぶ集団生活は、苦勞する場面も多かったと推測するが、概して非常に真面目に規律を守り生活していた。研修学生全員に、より良い生活にしようとする協力的な姿勢がみられ、中でもとりわけ、学生長・副学生長の積極的な行動により、学生同士が上手くまとまっていた。

4.1 船内生活全般

朝の点呼は当直団役員が担当し、各生活班の班長に班員の人数を報告させた。海の状態により船酔いや体調不良で参加できない学生が多くいた日もあったが、概ね出席率は良好であった。体調不良者が出た際には、点呼と同時に、班員全員の検温結果を報告させた。体操は担当班を中心に全員で実施した。班ごとに体操内容に差があったが、皆が楽しみながら参加できる

よう創意工夫を凝らした体操を実施する班も多くあった。

19:00の班長会議で全生活班の班長が学生食堂に集まり、学生長を中心として、各班からあがってきた議題について話し合った。内容により適宜、当直団役員および副団長へ報告、要望を出す。その後、副団長より船側との打ち合わせ内容を報告、当直団役員より団役員からの報告および要望を伝達する。その後、19:30の班別ミーティングで各居室にて生活班ごとに、班長会議での連絡事項等を班長から班員へ報告し、共有する。生活上の問題点や改善点について話し合い、必要に応じて班長会議での議題として報告する。22:00の消灯では、消灯時間後にも歯磨きや洗濯、シャワー等をおこなう者がいることや学生食堂に忘れ物が多いことが問題となり、班長会議での話し合いの結果、学生食堂の使用は基本的に消灯の10分前までとした。21:45より消灯15分前の掲示を5分ごとにおこなった他、21:50には学生長を中心に各自居室へ戻るよう学生への呼びかけがおこなわれた。班長会議は原則毎日実施され、活発な議論、意見交換がなされていた。また必要に応じて副班長やその他班員も班長会議に参加し意見を伝えるなどする様子が見られた。各々が積極的に行動したために、各係の役割の境界が曖昧になった部分もあったが、概ねどの係も有効に機能していた。また、5分前行動については、最初の頃に必ず守るよう副団長より伝えた。その後しばらくは守られていたが、次第に徹底されない様子も一部みられるようになった。しかしながら、団役員からの指示より前に班長会議にて議題に上がり、再度徹底するよう周知された。また、学生長・副学生長を中心に定刻の5分前点呼および集合の呼びかけが積極的におこなわれた。

4.2 喫煙・飲酒

喫煙に関しては、後部甲板の所定の場所のみで認めることとした。喫煙希望者が少なかったこともあり、大きな問題は発生しなかった。飲酒は感染対策の観点から団役員と乗組員で協議した結果、研修学生乗船から1週間は飲酒不可とし、その後は、当直団役員監督のもと20時～21時30分の時間帯に学生食堂でのみ飲酒可とした。なお、各寄港地での飲酒は一律不可、団役員は上記時間帯の学生食堂および居室での飲酒のみ可とし、サロンでの飲酒は不可とした。研修後半に体調不良者が出たため、飲酒不可とした日が1日あったが、その後は、班長会議での話し合いのもと、適切な範囲で飲酒可能とした。研修団は概ねルールを守り、大きな問題は発生しなかった。

4.3 掃除・大掃除

掃除は、各担当場所に団役員を配置し、清掃終了後に必ず担当団役員のチェックを受けるよう指導した。また、大掃除については乗組員の監督のもと実施された。朝食終了後から午前1の予定開始までの少ない時間の中で円滑に清掃を終わらせるため、研修学生が主体となり清掃担当表を工夫して作り変えるなど、清掃に対する積極的な姿勢が常にみられた。ゴミの分別や捨て方については何度か問題になることがあったが、その都度班長会議で対応が協議され、積極的な呼びかけをおこなうなどして解決が図られていた。

4.4 食事当番

食事当番については、初期の頃には、海洋学部の学生が中心となり、食事当番の流れを各班に積極的に指導していた。また、海の状態により船酔いで食事を取れない学生が多く発生した

ことから、ホワイトボードを使用し各班の食事状況を把握するなど工夫がなされた。慣れてくると、より円滑な食事当番運営のため、班長会議等でも積極的な議論がなされ、学生同士で協力し合いながら、当番班以外の学生も積極的に手伝う姿が多く見受けられた。なお、感染症対策のための布巾やスポンジ、パーテーションの取り扱いなどについては、団役員も積極的に介入し指導をおこなった。

4.5 洗濯・シャワー

洗濯は、節水のため1日2班ずつ交代で洗濯可能日を設定した。洗濯可能時間については当初、乗組員や練習生の洗濯時間との兼ね合いから13時～20時に設定していた。しかし、寄港地研修実施日はその時間帯に洗濯をやりきることができない旨、学生から訴えがあり、船側との調整の結果、寄港地研修日のみ洗濯可能時間を6時～22時とした。いずれの班も、1週間に1度のペースで各日程の隙間時間を有効に活用し、協力し合いながら洗濯をおこなっていた。シャワーは、節水のため奇数班と偶数班で交互に隔日シャワー可能日を設定した。ただし、船上レクリエーション開催後や入港時で使用水量の制限が少なかった日などは、研修学生全員に使用許可を出した。また、今回は国内航路であったこともあり、各寄港地にて温泉や銭湯を利用する研修学生も多くいた。

4.6 安全管理

安全管理については、各寄港地でのグループ別研修では、必ず男女混成グループで活動するよう指導した。また、海でのアクティビティについては、研修学生規則に基づきスキューバダイビングは禁止、その他についても必ず専門店に依頼しプロの監督者のもと実施するよう繰り返し周知し、厳格に緊張感をもって対応した。最終的に大きな事故が発生することなく各寄港地での研修を終えることができた。また、感染症が流行している中での研修航海であったが、カトラリーやコップの持参、使い捨て布巾やスポンジの使用、手洗いや消毒、黙食、マスク着用の徹底など、様々な感染症対策を実施した結果、コロナウイルスやインフルエンザなどの感染者を出さなかったことは特筆に値する。

5 総務

5.1 管財

管財担当として、研修航海に必要な様々な物品の準備・管理・運用を行った。まず、前回団役員との引継ぎを行い、また、事務局にて必要とされる物品を選別したリストをもらい団用品保管場所（5号館）において在庫の確認を行った。年末のオンライン研修にて生活班、行事班、クラブ等が決定したことで、各担当者に必要物品確認、新規購入希望物品の品目、数量のリストを提出してもらった。リスト作成の際には、極力新規購入を控えて現在ある物品を使うよう促した。提出されたリストについては、担当団役員にて最低限必要な物品に選別して事務局から発注を行った。必要物品がある程度揃ったところで、各担当の責任者に団用品保管庫に集合してもらい、物品の確認、整理を行った。衣装ケースの前面には、内容がわかるようリストを貼った。船内では、ホワイトボードに物品リストを掲示し、どこに何が保管されているの

か（学生食堂室、ドライ室、第三倉庫）把握できるようにして使用する際には団役員に声をかけてから使用するようして団用品の管理を行った。反省点として準備段階で船上活動のイメージがつかめず学生も何を用意したらいいのか決定するまで時間がかかり発注リスト作成が大幅に遅れ事前研修直前の納品になった物品もあった。

5.2 会計

まず、副団長名のデビットカード（残金0円にしておく）を準備し、出港直前に事務局の手配で大学会計より50万円の研修団予備金を口座に受け取った。本研修中では3万円を現金化し、急遽必要となった消耗品、寄港地調査に係る費用（種子島Aコース：陶芸体験参加費、広島両コース交通費）を支出した。決済方法としてデビットカードを用いることは、多額の現金を船内に保管したり、上陸時に持ち歩いたりする必要がなく、安全で研修団に負担の少ない手段であった。一方で、今回は島嶼部につきコンビニエンスストアやATMの設置がない寄港地もあり、寄港地での現金化に苦心した。出港前に一部を現金化しておく方がスムーズな会計処理ができると思われた。しかしながら全額現金で管理することに比べると負担が少なく、研修航海にとって最適な会計管理手段であると思われる。

5.3 船内交渉

船内交渉は、停泊中を除く毎日、18:30より定期的な船側とのミーティングを実施した。研修団からは齊木団長、田巻副団長が出席し、船側からは上河内船長、岩本機関長、菅野一等航海士、住吉事務長が参加した。研修団からは学生の健康状態や行事予定、学生からの要望等を伝達し、船側からは気象情報、水の使用状況等の情報が提供された。船と団で良好な関係を築くことができ、団の活動に対して全面的なサポートをいただくことができた。

5.4 船外交渉

事務局との連絡は、Eメールに加えTeamsのグループチャットを用いて行った。結団当初はEメールのみでのコミュニケーションだったが、連絡ツールとしてTeamsを使用したことで円滑なコミュニケーションを取ることができた。コロナ禍の影響および事務組織改編により、遠隔でも密なコミュニケーションを取ることが求められたため、Teamsでのコミュニケーションは非常に有効であった。

5.5 通信・記録、HP日誌

研修航海HP用のデータを携帯電話の電波が入るときにはWiFiから、電波の入らないときには、インマルサットを利用して事務局へ送信した。HP掲載用データは、あらかじめ担当の生活班と団役員が決められており、担当者に活動報告、コメント、5枚の写真（内1枚は班員全員が写ったもの）を用意させた。HP掲載に相応しくないものなどは添削を行った。また、担当者には、アルバム18枚以内の写真の提出もお願いした。写真は、担当班の写真のみに偏るため、団役員が撮影したデータからも選択して全体の活動がわかるよう調整した。提出の締め切りは班長会議までであったがスケジュール的に厳しい日も多く、実際には、消灯時間ギリギリ、場合によっては、翌日の朝まで締め切りを延長する必要があった。さらに前半はルールが徹底できず、縦の写真やiPhoneで撮影したJPEG変換されていない写真が多く、再提出を繰り返す結果となった。朝再提出させても寄港地研修を優先させるため、翌日の送信になること

もあった。それでも日々の活動の様子を送信することができた。

6 医療・看護

6.1 医療

COVID-19蔓延下での研修航海であったため、航海前の事前研修時に乗船者全員の抗原検査を行い、陰性を確認した。また、感染衛生に重点を置き、使用物品の消毒、手指衛生、嘔吐処理方法、黙食、マスク装着などの感染対策を徹底した。出港まもなく時化が続き、1時間後には多くの者が動揺病（船酔い）を自覚し、気分不快や嘔吐を訴えるものが続出した。各自が持参した酔い止めの内服と休養・水分摂取、休養を促し時間経過とともに船の揺れに慣れ、多くの者が回復した。しかし、症状が強い一部の学生には点滴を行った。寄港地に到着するごとに船の生活に慣れ、各自でコントロールすることができるようになった。その中でも症状が強い一部の学生には点滴を適宜行った。下痢や便秘を訴える学生もいたが、感染症からの症状よりも環境や食事の変化、疲労などからくるものと判断し整腸剤や下剤を処方し、手洗い・休養を促した。また、疲労や睡眠不足の蓄積により、体力が低下し、発熱・咽頭痛などの感冒症状を訴える学生も散見された。外傷については、大きく船体が揺れている中での転倒が2件、物の落下による切創や胸部打撲による胸痛などがあった。そのうち、転倒1件と胸部打撲による胸痛においては精査のため病院受診とした。それぞれ骨盤骨折、肋骨軟骨部打撲傷の診断となった。骨盤骨折については、疼痛範囲内での歩行は可、それ以外ではできる限り安静にしていることを条件に船内にとどまることも病院側から了承を得られた。しかし、改善の見込みもなく航海継続が不可能と判断し、寄港地八代港で下船の判断となった。皮膚疾患も2名いたが、軟膏の処方、持参薬内服の指示を出し、経過観察となった。船上生活という普段とは違う特殊環境からストレスがかかり、精神的不安定となる学生、団役員もいた。うち、1名は航海継続が不可能であると判断し、寄港地広島で下船。残り1名は、もともとかかっている心理カウンセラーとの面談を遠隔で行い（Teams）、大部屋から個室へ移るなどの対応も個別で行い横浜まで船上生活を行った。個室へ移動するにあたり、団役員だけではなく乗組員にも情報共有を行い有事が発生しないように細心の注意を払った。研修航海に参加する団役員や学生には事前に既往歴の有無などの聴取も行っているが、船上ですぐに対応することが難しい心疾患（不整脈）や精神疾患（適応障害や解離性障害）、学内の心理カウンセラーの相談室に通っているなどについて記載されていないことも散見されたため、今後は航海前に再度聴取する必要がある。動揺病についても同様で、普段の生活において酔いやすい（電車や車で酔う）などあれば、申し出てもらう必要がある。実際に、航海日程の半数以上自室から出てくることができない学生・団役員も見受けられた。このことから、募集や面接、選考の時点できめ細かい調査が必要だと考える。寄港地は気温の温度差が激しく、睡眠不足や疲労から発熱する学生が3名、練習生1名発生。それぞれインフルエンザ検査、抗原検査を実施し陰性であることを確認した。感冒薬としての内服を団として用意していなかったが、船側からいただいた市販薬で対応した。マスク装着、ベッドのカーテンを閉めることを条件に、大部屋から個室への移動は行わないことと

し、また、全学生が朝に体温を報告することも徹底した。医薬品・医材については事務局側より、日本国内での航海のため医薬品・医材を必要最低限にとの依頼があった。乗船医師と検討し、前回準備した数量から半数以上削減した。ただ、予想以上の海況の悪化により動揺病の発生があったことから、制吐剤などは増量してもよいのではないかと考える。航海前の事前研修時（乗船時）には、乗組員・練習生・学生に抗原検査を行ったが、次年度以降は実施するかの判断は世間での感染状況などを加味しての検討でよいと思われる。航海中、発熱が発生した場合にはインフルエンザ検査や抗原検査を実施したが、乗船医師と相談し、キットを持参する量・種類、検査実施の可否を検討する必要がある。医材については種類や在庫、非在庫でコンテナを分けていたが、コンテナ内の余剰スペースが多く、それ自体に重量があり、診療室が狭いこと、そして、航海する前に固縛が必要で物品整理に想像を超える時間と体力を消耗したことを考慮すると、今後は簡易的なもの（収納ケースなど）でもよいのではないかと感じた。

6.2 看護

看護においては、健康管理と感染管理に重点を置いた。アルコール手指消毒剤の利用、環境清拭用ルビスタタイプを環境整備の主戦力として持ち込み、各班の居室で使用できるように配布し、食堂内にも配置した。食事当番の前後での手洗い、手指消毒、机とパーテーションの拭き上げを徹底し、食器洗浄時の固形石鹸使用の禁止、拭き上げのタオル使用禁止をし、タウパーの使用へ変更した。慣れるまでに時間を要したが、研修航海の中盤からは学生が主体となって、どのようにすればよいのかを議論するまでになった。健康管理については、朝の点呼や体操に出られなかった学生を中心に、定期的に訪問し、生活班メンバーなどからも情報を積極的に受けられるようにして、健康状態を把握した。体調以外でも生活のストレスや不安を訴える学生もあり、適宜傾聴で対応。睡眠休養を含めた生活リズムの構築を支援し、心身の健康管理を行った。

6.3 遠隔医療通信

研修航海では医師・看護師が乗船しており、一般的な病気、軽微な怪我については対処できる体制を整えられている。また、陸上の医療機関との連携が必要な状況においては、衛星電話を通じて陸上との通話を行うことができる。さらに音声だけでなく動画による通信を行う必要が生じた場合には、ビーワンオフィス（情報担当）によって構築されたシステムによって行われる。具体的には、望星丸からインマルサット経由でインターネットに接続し Skype を用いてテレビ電話を実現するシステムである。8月の望星丸での団役員の研修、2月の事前研修会の際にレクチャーおよび通信テストを実施した。予定では清水出港後、通信テストを実施する予定であったが、海が荒れていたために実施できず、小笠原入港後に通信テストを実施した。この時には、望星丸の向きが悪く、衛星がマストの影に入り通信が不安定であった。結果、望星丸の映像は送れるが、伊勢原の映像は受信できなかった。音声は問題なく、原因も分かったため出港すれば問題ないということで終了した。今回の研修航海では、国内航路のため寄港地に到着すれば携帯電話での通信も可能だったため、衛星電話を使用してのテレビ電話を利用した遠隔医療が行われることはなかった。万が一に備えての万全な医療体制を整えていくことは今後の研修航海においても必要であると感じた。

7 おわりに

2022年度に3年の沈黙を破って実施した本研修は、1) 日本を海から捉え、2) 日本各地を歴訪することで各地の特徴を理解し、3) コロナ感染症対策を体験しながら集団研修の可能性を考え、研修の目的を達成できた。本研修において特筆すべきことは、洋上講座では学長をはじめ団役員全員が講師を勤めたこと、荒天で何度も行事のスケジュールを組み直したが、研修生にとって、問題解決能力を試す契機になり得たこと、寄港地研修では単に見学するだけでなく、ビーチクリーンや道普請（雨天により中止）等、受け取るだけでなく与える活動をしたことがあげられる。何よりもコロナが終息していない状況において、研修団全員が航海前も航海中も一人も発症しなかったことは奇跡に近いが、そのために、食事の際の飛沫防止対策パーテーション、マイ箸やマイカップの使用、マスクの常用等徹底した衛生管理を行なったことが功を奏したのであろう。3年ぶりの研修航海を、このような形でここに報告できた私たちは喜びに溢れている。教育の一環として研修航海を実行している日本で唯一の大学、東海大学、この大学で84人／28,000人として研修に参加できた学生は幸せである。そして、学生たちの成長を見守ることができた私たち教職員はさらに幸せである。今後も伝統ある研修航海が末長く継続することを切に願う。

謝辞 本稿を執筆するにあたり、2022年度東海大学第52回研修航海の企画委員長の山田清志学長をはじめ企画委員会ならびに実行委員会の関係諸氏に心から感謝申し上げます。また、ご協力いただきました研修学生の皆様や、昼夜を問わず安全航海に注力下さった望星丸上河内信義船長以下、運航関係者の方々に御礼申し上げます。

参考文献

2022年度研修航海実行委員会（2023）『東海大学2022年度研修航海 研修のしおり』。

内村鑑三（1946）『後世への最大遺物・デンマルク国の話』、岩波文庫。

2022年度研修航海実行委員会“研修航海について 航路と日程” 東海大学. 2023-03-20. http://tokai-ship.jp/52/second_route/、(参照2023-12-07)。